

『源氏物語』における「なまめかし」

山本 理

「なまめかし」という語は、多くの学者らによって、精力的に研究され論じられてきた。まず、その流れを辿ってみようと思う。

古くは吉沢義則氏の研究にさかのぼる。吉沢氏は、「なまめかし」美が平安時代に於いて、高尚美中の最高峰を示す美であったこと、教養に徹した人格の匂いであり、心身一如の風格美であったことを主張され、「なまめかし」が肉体的感覚美であることを否定し、当時の理想美であり、精神美であったことを強調された。（『源氏物語今かがみ』）以来「なまめかし」は平安時代の宮廷で最高美を表現する言葉として用いられていたと理解されてきた。その観点か

ら前田惟義氏は、紫式部は「なまめかし」に、單なる「なよやかさ」の意を含ませたのではなくて、精神的な「風格美」、昇華された「沈潜の美」、あえかなる「たそがれの美」という美的内容を與え、價值ある美的表現をつくり出した。」と述べておられる。（『なまめかし』論、国語と国文学 34・1）又、吉本浩士氏も、平安時代の「なまめかし」は精神的なものに重点が置かれていたとされている。（『なまめかし』について、文法教育1）

それに対し、島津久基氏は、「うるはし」という端正美「らうたし」という可憐美に対して「なまめかし」は滑柔性に富んだおのづからなる媚態の印象に与えられており、性的美、官能美を意味する語とされた。（『国文学ノート』）森岡常夫氏は「素よりなまめかしは、感覺的なる美であるには相違ない」と述べておられる。（『源氏物語の人間美』解

積と鑑賞12・6) 続いて、遠藤嘉基氏は「なまめかしのもつ美のニュアンスは、華に流れずきはめて上品な、しかしそれは決して淋しい影のつかぬ、むしろみづみづしささへ含んだ新鮮な感覺美であった」と述べられた。「古典の解釈」解釈と鑑賞12・10) 北山谿太氏は、なまめかしはしめやかさを含んだなよかさを表し、転じて色めかしい、あだっばい意を表わすことがあったとされ、強調・強烈・莊嚴などとは相反し、上品・清らか・花やかなどの性格を含まず、理想美とは言えないとされた。「なまめかし」【艶】考、国語と国文学31・12)

犬塚旦氏は、吉沢氏・島津氏の両論の上に立ち、「なまめかし」を以つて、吉沢博士の如く上品な精神美として把握することも、又島津博士の如く性的な官能美として規定することもいづれもそのまゝにはとりがたい所であらう。両博士の説を一旦ときまぐして後、より高次の座における両者の統一を、調和を思ふ。と述べられ、さらに

国粹美たる「なまめかし」は上品な・女性的な・親愛感にみちた・自然な・地味なそして若々しい人間美であつた。

と論じられておられる。(「王朝美的語詞の研究」)

犬塚氏以降、注目すべきは、大野晋氏、木之下正雄氏、

北村英子氏、梅野きみ子氏らであろうか。

大野氏は「なまめかし」が平安時代の宮廷で最も高い美の範疇の一つとして位置を占めていたとされた。(「日本語の年輪」) 木之下氏は「柳の枝のしなやかにみずみずしいさまがナマメカシ」であるとされた。(「平安女流文学のこゝとば」) 北村氏は「なまめく」「なまめかし」について「平安初期においてはみずみずしい、しなやかさが感受し得るような人物の姿態・行動に対してその美が向けられていたが、平安中期になると、華奢なほっそりとした姿態を示すようになり、しつとりとした簡素な美へと推移している。」と述べておられる。(「なまめかし」) 梅野氏は、数多くの論文をよく検討し全用例文を細部まで研究されて、その上で「源氏物語」の「なまめかし美」は、紫式部独自の美意識によつて創造されたものである」と述べられ、更に「源氏物語」においては、それまでの「なまめかし」に認められた華麗美を脱し、晩年の光源氏に見られるような、年齢を感じさせないみずくしくしつとりとした美にまで磨きあげ高められている」とし、「源氏物語」における「なまめかし美」の独自性を認めておられる。(「えんとその周辺——平安文学の美的語彙の研究」)

以上に挙げたように、「なまめかし」については諸家により研究し尽され、論じ尽されているが、敢えて自分なり

の答えを見つめるべく、諸先学のあとを辿り、平安時代の社会通念などにも視点を向けつつ、全用例文を検討し、『源氏物語』における「なまめかし」のすべてに通じる意義を探つてみようと思う。

二

「なまめかし」の語義を考えるにあたっては、この語を一般的には「なま」+「めかし」としてとらえるのが普通のものである。そうした場合、どんな解釈が考えられるのだろうか。諸説を挙げてみる。

西村享氏は「なま何々」という言葉は「いずれもそれが本格的でないことを示すものでちよつと何々だ、中途半端に何々だ」という意味を持っている」とされた。(『新考王朝恋詞の研究』)

北山氏は、賀茂真淵翁の『源氏物語新釈』の「物まだ熟せぬをなまといふ。譬へば、草の成り定まりては、こはぐしきを、わか草はうるはしうて少女などにたとふるが如し」を引き、「なまめくをなよやかなさま、しめやかなさまと解すれば、なまの原義をそのままに伝えることになる」と述べておられる。

これに対して前田氏は、

「なまめかし」が「しめやかなさを含んだなよやかさ」というより、「優雅」「優美」に近いと思われる。ただし「なよやかさ」の意がないというのではなく、それのみに限定することが誤りであると言いたい。(中略) 原義は、「明るくて、若々しくみずみずしい美しさ」と思われる。この「なまのみずみずしさ」が可憐美をまして、きやしやかなわいらしい美しさとなり、美的要素が表面化すると、花やかなければ美しい、匂うような美しさとなる。美的要素が内面化し、品位をもつてくると、奥ゆかしい優美さとなる。これが沈潜すると、優雅・閑雅・幽雅・高尚なしめやかな美となる。このようにその重点のおき方によって、「なまめかし美」の系列が、色々に展開してくるのである。

また木之下氏は、「ナマは、未熟・不十分の意味に多く使われている」が「現代語の生の意味」が本来の意であるとして、「ナマメクのナマは、枯木に対する生木で、生木のしなやかなみずみずしい姿」であり、そこから「柳の枝のように細くしなやかにみずみずしいさまがナマメカシであり、そのようなさまをするのがナマメクである。」とされた。更に「ナマは、芽ぐんでいて、もう少しで成熟に達するという状態」と定義付け、なまめかしは、みずみずし

さをさすのが主であり、若い人に感じられると述べられた。この木之下氏の説については、後に再び取り上げる。木之下氏の論を踏まえて梅野氏は、

動詞「なまめく」の語義を、形容詞「なまめかし」の語義と対照し、しかも宇治十帖を別に考察することによって『源氏物語』前編に見られる両語の美意識の違いは明らかにされるものと思う。そして、形容詞「なまめかし」の方が動詞「なまめく」より高く評価される理由も、このような美意識の違いによって説明され得よう。(中略) 光源氏の「なまめく」は野分の巻で夕霧に思い出させた紫上に寄り添う姿を最後に、ふつり見えず、晩年の源氏は専ら「なまめかし美」によって描かれている。光源氏晩年の「なまめかし」は若い時のもてつけたたをやかな美そのものを表わした「なまめく」とは異なり、『源氏物語』本文用例略) 人の親となつてもなおかつ年令を感じさせない、教養・人格により支えられたみずみずしい姿態・振舞を表わしている。

と述べて、「動詞と形容詞という機能の相違によってかくも微妙な語感のずれをもたらししている」と説明されている。今、私は、動詞と形容詞という機能の相違により語意に幾らか差異が生ずることを認知した上で、形容詞「なまめ

かし」のみに焦点を絞って探究していこうと思う。

本題に戻る。多くの関連文献の中で、語源について論じ異色を示すものは大野晋氏の説である。氏は「なまめかし」について、「未熟めいている」「未熟らしい」というのがもともとの意味であるが、その実「決して未熟ではなく、心しらいにおいて、表現においても、実現された美しさにおいて、十分の心づかいがされているが、しかも未熟のように見える。さりげなく何でもないように見える」ことと述べられ、「色ならば鈍い色」「しめやかで、何でもないのでいて、しかも人をひきつける見事さのあるもの」と定義された。「みずみずしさ」「若々しさ」については一切触れておられない。

大野氏は「めかし」の意義についても具体的に言及しておられ、「そのもの本来の様子そのままに見える」という場合と、「別のものが何となく本もののように見える」という場合との二つの意味を持ち、「なまめかし」では後者の意味合いで「めかし」が用いられていると考えておられる。これによれば「なまめかし」の語義として、未熟のように見えるが、実は決して未熟ではなく、「美しさにおいても、そのいたりつくところ、表わすところ、心がけているところ、まことに行き届いているのであるが、それがさりげなく、何でもないように——『なま』であるように見

える状態」が「なまめかし」であるということになる。しかし、語義の分析のみを云々しても仕方がないので、次に別の面から検討していきたい。

三

「なまめかし」という言葉が、ある美しさを示すときに、どのようなもののどのような状態を対象としているのか検討していくにあたり、以下、その対象が人物である場合に焦点を絞って、(一)年齢、(二)人間像という二つの観点から探っていく。

(一) 年 齢

「二」で触れた木之下氏の論を振り返ってみる。氏は形容詞なまめかしがみずみずしさを主としてさしていたとされ、更に踏み込んで「ナマメカシは若い人に感じられる。老人は勿論、幼児もウツクシゲではあってもナマメカシではなかった。」と述べておられる。

だが果たして実際に「なまめかし」は老人や幼児に対して用いられることがなかったのだろうか。

そこで、「なまめかし」について、『源氏物語大成』の索引を用い、そのすべてについて、『日本古典全書』によって用例にあたり、抜粋し表にまとめた。表の作成に関して

は、梅野きみ子氏の「なまめかし」全用例の分析表を大いに参考させて頂きながら、人物の年齢について調べた。結果は以下に示す通りである。

ここでは対象人物の年齢に着目しており、人物以外の対象はすべて「その他」とした。また、梅野氏の分析表における「なまめかし」の通番14と59の『古典全書』の頁はそれぞれ二〇四は二〇二の、五九は一三四の誤りであり、77の『古典全書』の冊巻は七である。

表1 「なまめかし」用例分析

通番	巻		冊頁	対		象
	人物	年齢		その他		
1	桐壺	源氏	174	7		
2	夕顔	源氏	279	17		後宴の遊び
3	花宴	源氏	402			
4	賢木	藤壺	84	29		
5	〃	朱雀院	90	27		紫上の筆蹟
6	〃	藤壺	94	29		
7	〃	藤壺	103	29		
8	〃	源氏	103	25		
9	須磨	源氏	126	26		

31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
〃	初音	玉鬘	少女	〃	〃	〃	朝顔	〃	薄雲	〃	〃	松風	〃	絵合	〃	濡標	〃	明石	〃	〃	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	三	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
137	136	129	55	36	29	23	22	330	327	296	293	291	275	269	222	205	202	179	147	144	130
	童女	×内大臣	雲井雁	朧月夜君	源内侍	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	源氏	齋宮女御	(童隨身)	朱雀院	朱雀院	朱雀院	朱雀院	源氏	源氏
	不明	不明	14	不明	69	32		32	32	31	31	31		22	32	31		29			26
	明石邸の御簾の追風						朝顔の御簾の追風							御使の祿	紫裾濃の元結			明石入道邸の木蔭			六条御息所の筆蹟
53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32
〃	〃	〃	若菜下	〃	〃	〃	〃	〃	〃	若菜上	〃	〃	〃	藤裏葉	〃	〃	〃	梅枝	藤袴	胡蝶	〃
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	四	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
150	148	133	120	97	96	87	84	57	45	40	359	347	341	338	331	328	321	319	264	150	143
	明石上		東宮	明石女御	明石女御		明石女御	源氏	源氏				源氏	源氏	内大臣				夕霧		
38			16	13	13		12	40	40				39	39	不明				16		
	明石女御の箏	東遊び					明石女御の出産祝			朱雀院の饗応	六条院の童舞					紐	草子	朝顔の消息	源氏の合わせた侍	紫上の釣殿の設備	空蟬の闕伽の具

74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	
宿	早	〃	〃	〃	〃	総	〃	椎	〃	竹	〃	紅	〃	〃	匂	御	〃	柏	〃	〃	
木	蕨	〃	〃	〃	〃	角	〃	本	〃	河	〃	梅	〃	〃	宮	法	木	〃	〃	〃	
〃	〃	〃	〃	〃	〃	六	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	五	〃	〃	〃	〃	
146	113	102	63	60	40	30	287	259	177	171	155	152	148	141	134	98	249	235	181	162	
薫	中	薫	匂	匂	中	大	大	薫	鬚	薫		の	按	薫	薫	薫	紫	女	朱	落	六
	君		宮	宮	君	君	君		黒			中	察		・	上	三	雀	葉	条	御
						・			の			君	大		匂		宮	院	宮	息	所
						中			中				納		宮						
						君			君			言									
25	25	24	25	25	24	26	25	23	23	23		24	20	15	14	43	22	51	不明	54	
						24									15	15	23				

琵琶

計	80	79	78	77	76	75
	蜻	〃	〃	浮	東	〃
	蛉			舟	屋	
	〃	〃	〃	七	〃	〃
	104	85	51	43	259	169
62	薫	匂	浮	薫	薫	薫
		宮	舟			
	27	28	22	27	26	25
			前後			
18						

木之下氏は、源氏の幼さでなまめかしいことが例外的であることを示すものとして

御方々にも隠れ給はず、今よりなまめかしい恥かしげにおはすれば、いとをかしう、打ちとけぬ遊びぐさに、誰も誰も思ひ聞え給へり。(一番。数字は前掲表の番号)をあげられた。確かに「なまめかし」は一般的には幼い者には用いられない語であるとみてよいであろう。しかし、ここでは「今よりなまめかしい恥かしげにおはすれば」とあり、「こんな若い年齢でも」とか「幼い者には似ず」とかいう気持で使われ、早くから神童ぶりを発揮していた源氏の形容であって、例外的ではあっても他の場合の用法と背馳しないのである。

では、一方老人についてはどうであろうか。ここで注意すべきは「老人」の定義である。

橋本義彦氏の「平安貴族」によると

平安貴族は元服して成人の仲間入りをするのも早かったが、老年期に入るのも早く、四十歳を初老といって服装の面でも色々な変化が起こった。試みに摂関・院政期の、冷泉天皇から近衛天皇までの歴代十四人の平均年齢を計算してみると、四十一・六四歳となる。長寿を祝う算賀の行事が四十歳から始まるのも不自然ではなかったのである。

とある。四一・六四才という数値は、最上流階級の天皇のデータである。これに下級貴族や庶民のデータを加えた場合には、更に下がることが大いに予想される。『源氏物語』では夕顔のように一九才という年齢で世を去った者から、横川僧都の母尼のように八〇才で初めて登場する者など様々であるが、その作者紫式部が後宮の女性であった為か、物語の登場人物の社会的階層は、まず最上流の皇室、それに密接する高級官僚、そしてそれに付属する地方官、及び中級官吏、後宮の女房たちに留まっている。それ故か、物語の登場人物の平均寿命はやはり四〇才程度のものである。これは初老といわれ、死に近づきつつある寂しい年であったようである。

再び表1に戻る。年齢の欄に着目すると、主に二〇代、三〇代前半の言わば「人生の最盛期」にある人物に多く用

いられてはいるが、六九才の源内侍を始め、五四才の六条御息所、五一才の朱雀院、三九才・四〇才の源氏、三八才の明石上にも用いられている。

このことから見て、老人になまめかしが用いられなかったことは誤りではないかと思う。木之下氏が、そう述べられた根拠として「ナマは、芽ぐんでいて、もう少しで成熟に達するという状態だからである。」とされていたが、実はその「ナマ」という言葉の解釈に「生木のしなやかでみずみずしい姿」を感じておられたところに問題があったのではないだろうか。

(二) 人間像

「なまめかし」という評価をうけた対象の中には自然・事物に関するものもあるが、その多くは人物であった。使用回数は光源氏が最も多く一五回、次いで薫の一回、朱雀院の五回、匂宮の四回、明石女御・宇治八宮の中君らの三回と続く。女性よりも男性に多く用いられている。主人公光源氏に頻用されていることから、作者が「なまめかし」を以って主人公の特色とし、そこに理想美を認めていたと考える根拠となろう。

ものものしく、雄々しい華やかさをもった頭中将・夕霧が「なまめかし」と評されたのは、それぞれ一回限りである。

君達いとあまたひきつれて入り給ふさま、ものものしうたのもしげなり。丈だちそぞろかにものし給ふに、太さもあひて、いと宿徳に、おももち、あゆまひ、大臣といはむに足ひ給へり。葡萄染の御指貫椽の下襲、いと長う尻ひきて、ゆるゆるとことさらびたる御もてなし、あなさらさらしと見え給へるに、六条殿は、桜の唐の綺の御直衣、今やう色の御衣ひき重ねて、しどけなきおほぎみ姿、いよいよたとへむものなし。光こそまさり給へ、かうしたたかに引き繕ひ給へる御有様に、准ひても見え給はざりけり。

(行幸) (三) 二四七・8

と、頭中将の体格がよく、貫禄が備わり、仰々しく盛装した様子と、天与の光こそ優っているが、それに対し、ゆつたりと打解けた姿の源氏を比較させて描いている。藤裏葉に見られる頭中将の詞では

「のぞき見給へ。いとかうざくにねびまさる人なり。

用意などいと静かに、ものものしや。あざやかにぬけ出ておよずけたる方は、父大臣にもまさりざまにこそあめれ。かれはただいと切になまめかしう愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中わするる心地ぞし給ふ。おほやけざまはすこしたはれて、あざれたる方なりし、ことりぞかし。これは才の際もまさり、心もちる男々

しく、すくよかにたらひたりと、世に覚えためり」(40番)

と夕霧と光源氏を比較し、評している。夕霧の「才のきはもまさり、心もちる男々しく」は源氏の「なまめかしう愛敬づき」と対立する価値である。頭中将・夕霧のもつ、ものものしさ・雄々しい華やかさは、「なまめかし美」と評価されるものとは、相反する性質をもっているようである。また「なまめかし美」は光源氏の年令と共に徐々にその美の深さを増したようである。

御用意なども、昔よりも今すこしなまめかしきけさへ添ひにけり。(25番)

朝顔に言い寄る源氏の様子である。源氏の卓越した美質神才と多感な性格が「いろごのみ」ともよばれる絶対的魅力の権化として成長し、様々な女性交渉が織りなされていく。「いろごのみ」として認められた源氏に対する評価として「なまめかし」が用いられている。

また一旦は臣籍降下されたものの、准太上天皇に昇進し、再び皇室の権威を得て、無上の権勢への栄達を果たした後の源氏が、降下した女三宮に手紙を送る場面で

鶯の若やかに、近き紅梅の末にうち鳴きたるを、源「袖こそほへ」と花をひき隠して、御簾おしあげてながめ給へるさま、夢にも、かかる人の親にて、重き位と

見え給はず、若う、なまめかしき御様なり(45番)

と書かれ、晩年を迎えた源氏に対する評価として、ここでも「なまめかし」が用いられている。更に用例としては一回であるが、衰弱し最期を迎えた紫上の容姿について

こよなう瘦せ細り給へれど、かくてこそ、あてになまめかしき事の限なさもまさりて、めでたかりけれ、と来し方あまりにほひ多く、あざあざとおはせし盛りは、なかなかこの世の花のかをりにもよそへられ給ひしを、限もなくらうたげにをかしげなる御様にて、いとかりそめに思ひ給へる気色、似るものなく心苦しく、すずろにものなし。(58番)

と評されている。源氏の晩年、紫上の最期の姿に現れているのは、他人を意識したような仰々しい華やかさではなく、自然に滲み出てくるしつとりとした洗練された美しさであると思う。

同様に薫に対する用例(60・74・75・76番)を見ても、取り立てて挙げるほどではないように見えながら、実はしつとりと控え目な美しさを備えた男性として描かれているように思う。

先に挙げたように諸家の多くは「若々しき」「みずみずしさ」に視点を向けておられる。確かに「若うなまめかし」といったような用例も見られるのだが、「なまめかし」自

体は必ずしも「若々しき」「みずみずしさ」と同調するものとみなくても、文意は通るのではないだろうか。(これについては、次の四でふれる)。「なまめかし」の対象となる人物には、けばけばしい華やかさ、力強さは見られず、年を取るに従って人間的にも幅を増し完成しつつある中で、これといって取り立てることのない、何でもない様子に見えるほどのしつとりとした洗練された美しさが、更に深みを増して、その人物を内面から支えているように思われる。

四

言葉の意味を探るときには往々にして近接語調査が行われる。これはその語と近接語は文脈において、意味の上で諧調し、類似する要素があるのではないかという前提によるものである。

『源氏物語』のなまめかしに近接する語は(語句を隔てるものも含めて)併用語として「あて・いと」の一二回、「清ら」の九回、「をかし」の六回、「今すこし・はづかしげ・をかしげ」の四回、「心深く・あはれに・若う・すこし面瘦せ細りて・めでたく」の三回、「いとど・清げ・いみじく・こよなう瘦せ細り給へれど・なつかしき・すみた

るさま・面白し・つきせず・言ひ知らず・せちに・ことに
て・さまことに」の二回、「いとも・けだかく・はづかし
く・気色ばみ・心深きけ・もの深う・いたり深う・心のお
く多かりげなるけはひの・重りかに・いとかりそめに世を
思ひ給へる気色・人の親げなく・夢にもかかる人の親にて
おもき位と見え給はず・いとど小さう細り給ひて・瘦せ瘦
せにあえかなる心地して・なごやかにぞ・なつかしう・愛
敬づく・愛敬こぼれ落つる・かぎりなく・いはむかたなく
・世になく・世の常ならず・うす鈍にて・そびやかに・奥
ゆかしう・女しき・いとこそぎたる様に・しめやかなるに
・すこう・うちうちの・こまやかなるみやびの・うるはし
からず・らうたげに・うつくしげに・うつくしき子供の心
地して・人よりことに・ものより殊に・さま変りて・けは
ひ殊に・珍らかに・すぐれて・ふり難く・容貌よき・眩き
心地・中々・またなう・えんだち・えんなる・えんなる方
はさるものにて・今めかしう・限りなさもまさりて・には
ふ・吹にはほはして・なよびかに」の各一回と、対照語とし
て「匂ひやか・匂ふ」の二回をはじめ、「花やかなる・を、
し・すくよかに・清げ・清ら・うるはし・あなめでた・を
かしげ・ことさらめきてえん・えんだつ・うちあだけすぎ
たる・おどろおどろし・わざとの」の各一回が挙げられる。
ここで取り上げたいのは「若うなまめかし」という用例

である。近接語調査によって語義を考察する際、「なまめ
かし」にこの「若う」を併用した例があったがために、「な
まめかし」自体に「若々しさ」或いは「みずみずしさ」の
意を求めるような解釈がみちびき出されてきたとも考えら
れよう。また、「若々しい」というニュアンスを含んだ解
釈をされる用例に「人の親げなく」「夢にもかかる人の親
にしておもき位と見え給はず」が挙げられる。しかしこれ
らの例に関して、大野晋氏の論によって説明がつくと思ふ。
つまり、実際には完全であるとも感じられるほどの人格
でありながら、表面的には何でもないように見える様子を
表現しているものと考えられる。ここでの解釈のポイント
は「若う」であり、この場合「生氣溢れる若々しさ」では
なくて、例えば45番の場合では「重き位と見え給はず」に
諸調する「若う」即ち、「若年であるが故の未熟さ、不完
全さ」を比喩的に表しているものと考える。

また、併用語として用いられながら、対照語としても用
いられている「清ら」と「をかしげ」の解釈について、梅
野きみ子氏は「同調語ではあっても、必ずしも必要条件で
はあり得ない」と述べておられる。私もその論に従いたい。
尚、「なまめかし」の属性について、犬塚巨氏は「あて」
はむしろ「なまめかし」の本有的性格をなす」と述べられ
た。「なまめかし」美は「匂ひやか」「雄々し」「花やか」「す

くよか」等の語と相反する性格を持ち、「あて」に通ずる優雅な振舞を表していると思われる。

理想美とされる「なまめかし」は、上品な高貴さをその根本的意義とする「あて」に同調され、更にその美を完成させるものであると考えられる。

五

【源氏物語】中で八十例挙げられる「なまめかし」について、その語義を考察すべく全用例を検討してきた。形容詞「なまめかし」自体は上代には用いられず、平安時代に生まれ、好まれて用いられるようになり、語の形成上幅広い意味を与えられ、【枕草子】「なまめかしきもの」(岩波文庫本八十九段)の対象は全て、新鮮さに溢れた優美さを示すものであったが、これは決して必ずしも【源氏物語】の用例に通じるものではなかった。

【源氏物語】における「なまめかし」は「めかし」の強い作用により「若々しい美しさ」といったものを完全に突き抜け、更に高次元的に「さりげなくしつとりとした美しさ」を表わす言葉としての奥行きを与えられた。「何とない様子、何とないみたいだ」ということは、その実は何ともないことではないのである。卓越した知性・感性・教養

・容姿・状態などが、いかにも何でもないように見えつつ、その奥には、無意識的にそれらを抑制した形で表現することが出来る程の、更に高度な知性、教養といったものが充溢する様子が伺われる。一見して明解な、きらびやか、ものものしいといった性格とは相反する性格をもち、人物自身に秘められている人間性に大きく依存するこの「なまめかし」美には、「あらわを避け、包み押えた気持の表明」を導び、謙虚さを重んじる風調をもった後宮の女性達の価値感が強く現れていると思う。

上品で優しい情趣生活の中から生まれた「なまめかし」は、華やかで雄々しい頭中将や夕霧よりも、どちらかというと女性的な性格を以って描かれる光源氏、薫に用いられ、彼らの年齢と共にその価値を更に高めつつあるものであった点に、紫式部の意図的な美意識語駆使の程を見てとることが出来る。

やはり「なまめかし」は無意識的な謙虚な様子をそのまま表現、表現したものであり、当時の宮中において最も活躍した女房階級に属した紫式部が、重要視或は尊敬視した理想美の一つであると言つて良いだろうと思う。更に、「なまめかし」が精神面を表現するのに用いられ磨き上げられたとき、中世以降の美意識に深く関わっている「幽玄」「さび」といったものにまでその美は深められ、日本の伝統的

美意識の起源として確立されたものと思われる。

(平成四年度国文学科卒業生)